

令和2年神奈川県議会本会議 第1回定例会
ともに生きる社会かながわ特別委員会

令和2年3月10日

小野寺委員

私からは、県立高等学校のインクルーシブ教育について、当事者であるインクルーシブ教育実践推進校の生徒たち、生徒自身がどのような思いを持っているかを、取り上げていきたいと思います。

これまで、本会議や文教常任委員会の場で、インクルーシブ教育に対しての認識を深めさせていただきましたが、それでも、県立高校に知的障害のある生徒を受け入れるという形でのインクルーシブ教育は、イメージが私自身もつかめなかったところであります。

高校は、言うまでもなく義務教育ではありませんから、学力で生徒を選別して入学させるわけで、一定の学力レベルの集団であるからこそできる教育もあるし、恐らく高校の教育は、それを前提に進められてきたと思います。学習の理解のスピード、深さが異なる生徒が同じ教室で同じ授業を受けることで、そのために、先生を1人をまたつけるとはいっても、大丈夫なのかという印象を持っておりました、そういう疑問が、いまだにあまり脳裏からきちんと離れていないことが現実ですが、ただ、神奈川県教育委員会が本当に覚悟を決めて、挑戦的な事業に取り組んでいます。

ですから、ぜひ成功してほしいし、大きな成果を収めてほしいと願っています。

ただ、当初から否定的な声もいろいろ出ていたことも、承知しています。例えば、健常の生徒と障害のある生徒が本当にじめるのか、障害のある生徒がクラスに少ないので、障害のある生徒が友達をつくりにくいのではないか、健常の生徒の学習にも支障が出るのではないか、障害のある生徒にとっても、特別支援学校と比べて手厚い指導、教育が受けられないのではないかといった声があったことも、承知しています。知的レベルや社会的な適応力が違い過ぎる集団に一律の教育を行っても、うまくいくわけはないという論調もありました。中には、これは生徒のためというよりは、教育委員会の自己満足だという厳しい声も出ていたことは事実です。

そういう意見も散見されていましたので、今回、インクルーシブ教育実践推進校の生徒の理解について、主役は生徒でありますから、そこについて何点か伺います。

まず、パイロット校での取組が始まって3年がたちますが、インクルーシブ教育の取組について、在籍している生徒はどのように、自分たちに施されている教育を捉えているのかをお聞かせください。

インクルーシブ教育推進課長

パイロット校に在籍している生徒の感想の御質問がありましたが、この制度で入学をされた生徒、一般募集で入学された生徒の二つの気持ちがあると思いますので、分けて答弁します。

まず、この制度で入学した生徒の意見ですが、パイロット校での学校生活に

ついて、毎日活動している部活動や、友達と参加した修学旅行などの学校行事がとても楽しかった、学習については、難しいことがあっても、頑張った結果、力につけることができたといった感想があるほか、先ほど部活動と言いましたが、水泳部に入部しました、毎日練習して日に焼けてしましました、頑張って試合にも出たい、体育祭の競技には全部参加しました、クラスの友達と写メ撮りました、吹奏楽部に入って、高校の野球の応援に行ってスタンドで演奏しましたなど、大変高校生活を楽しんでいる感想が聞かれました。

また一方で、一般入試で入学した生徒の感想ですが、県教育委員会で作成した啓発のためのリーフレットである、かながわのインクルーシブ教育の推進を活用した講演会の感想の中に、様々な生徒が互いに認め合って協力していくことは、いいことだと思う、互いに尊重し合える学校にしたい、インクルーシブな学校をつくるためには、学校が動くだけではなく、生徒の私たちから変わつていけば、もっとよい学校づくりができるといった意見もありました。

茅ヶ崎高校で平成30年度に実施をしたアンケートでは、本校が全国に先駆けてインクルーシブ教育実践推進校であることは、よいことだと思いますかという質問を全校生徒に行ったところ、58.3%がとてもそう思う、33.3%がそう思うと回答し、全体の約91%がインクルーシブ教育実践推進校であることを肯定的に捉えています。

小野寺委員

今、いろいろお聞かせいただきましたが、いい話ばかりです。中には、戸惑っている生徒だっているはずですが、そういう声はきちんと届いていますか。

インクルーシブ教育推進課長

生徒の中には、学校生活になじめない、そのなじめないということも、御本人の学校生活以外のところに課題のある生徒もいて、例えば、夜と昼が逆転した生活をしているために、学校に行きづらくなってしまう生徒もあります。結果的に進路変更するという生徒もおりましたので、そういうふうな話ももちろん、多くの生徒がそういう肯定的な意見ではありますが、中には、そういうふうな学校生活以外のところにも課題があって、学校を進路変更していく生徒もあります。

その理由としては、学校生活以外のところに課題がある生徒もいますが、アルバイトに大変興味を持って、学校生活以外の新たな進路選択をしていった生徒もいると捉えております。

小野寺委員

茅ヶ崎高校の校長も、メディアのインタビューで、勉強についていけないというよりは、それ以外のいろいろな要素で、途中で辞めていく生徒もいるとおっしゃっていた気がします。例えば、特別支援学級で少人数の個別対応のところから、いきなり1クラス40人の集団に入ることによる戸惑いも影響しているとおっしゃっていました。

その記事を読むと、障害者として入学したことを知られたくない生徒もいて、勉強が分からなくても、手を挙げて助けを求めることができないで、余計に苦しい立場に追い込まれたというケースもあるらしい。だから、多分現場では、いろいろな課題がまだまだあるとは思いますが、ただ、そうは言っても、先ほ

どの肯定的な声も大きいことは事実だと思います。

これは、本当に神奈川県の教育にとって、ますます壮大なトライアルなような気もしています。だから、関心を持っている県民、どれだけの人たちが関心を持っているかは分からぬが、当初、どうせもう来ないと思っていた人たちも含めて、そういう県民の皆様に、現場の生徒の声をしっかりとこちらで調査して届けるという機会は、これまでどのくらいあったのでしょうか。

インクルーシブ教育推進課長

県教育委員会では、これまで実施をしてきましたが、令和元年度に実施したインクルーシブ教育推進フォーラムにおいて、これまでにない取組内容として、インクルーシブ教育推進実践推進校のパイロット校に通う知的障害のある生徒、またその保護者の方に、壇上に上がっていただいて発表をしていただきました。

インクルーシブ教育推進フォーラムは、県民の皆様とともに、本県におけるインクルーシブ教育の推進について考えることを目的として、平成26年から継続的に開催しております。教員などの学校関係者だけでなく、子供たちや保護者をはじめ、地域の方々、労働や福祉の関係者の方など、多くの県民の皆様にインクルーシブ教育の推進について理解を深めていくことが必要と考えて開催しています。

このフォーラムですが、令和元年度は、南足柄市、厚木市、寒川町、相模原市の4会場で開催し、合計で810人の参加がありました。

小野寺委員

インクルーシブ教育推進フォーラムでは、どういう発言、どのような声が上がっていましたか。

インクルーシブ教育推進課長

南足柄市で開催されたインクルーシブ教育推進フォーラムでは、実際にインクルーシブ教育実践推進校で学ぶ生徒3人が、先生と一緒に登壇しました。高校で学ぶことを選んだ理由を会場から質問を受けたときに、その生徒が御自身で回答しましたが、一番は、友達とたくさん話したかったからだ、そう思ったから選んだという思いを伝えてくれまして、また、誰でも困っていたら助けを求めるし、自分たちも分からぬことがあつたら、先生や隣に頼ればいいと思うという素直な意見も出ていました。

厚木市で開催されたフォーラムでは、保護者の方が登壇をしました。高校でいろいろな経験を通して、子供の成長を感じている、人は環境で育つ、高校という環境で、自立心を育み、努力することを学んでもらえればと期待しているという言葉がありました。

寒川町で開催されたフォーラムでは、インクルーシブ教育実践推進校の教員が、生徒のアンケート等を交えて実践報告をしました。3年生が夏休みに企業に体験実習に行って感じたことを、学校の中で下級生と教員にプレゼンテーションをしていることがありました。その中で、後輩に対して、発表者が発言をしている内容を紹介してくれたのですが、仕事をする際に、失敗することや難しいこともあるかもしれないが、めげずに前向きな考え方で取り組めば、仕事もきっと楽しいと思うということを、後輩に対してお話をしていたことを紹

介していました。

小野寺委員

それを聞いて、その場で参加されていた方々は、どのような反応をされましたか。

インクルーシブ教育推進課長

いろいろな方が参加をしていましたので、それぞれの感想をお答えしますが、教員の方が参加をしていましたが、その教員の方の意見としては、前向きに取り組んでいる高校生の声を聞いて、インクルーシブ教育の理念の実現に向けたチャレンジを前進させていく思いを持った、共に学び、相互理解に努めることが大事だ、大切だという意見が寄せられました。

また、学生も多く出席していましたが、教育関係者ではない一般の方に、インクルーシブ教育の理念を伝えるにはどうすればいいかという声や、大切なのは学校だけでなく、インクルーシブな社会を実現することだという意見もありました。

保護者からは、結果的にみんなで地域づくりができたらしいと思う、先生だけで全てを抱え込まずに、地域のことも活用してほしいという意見もありました。

また、一般の参加者から、今後のインクルーシブ教育の発展を応援していくたい、先進的な取組で多くの課題があると思いますが、こうしたフォーラムを開いて、市民からの意見、当事者からの声を聞いて、解決してほしいといった意見をいただきました。

中には、生徒の中学校のときの先生も参加をしておりまして、意見をいただいたのですが、大変成長しているのでびっくりしたという御意見も、その場でいただいております。

小野寺委員

今、インクルーシブ教育推進課長が紹介していただいた中で、一般県民の方の声がありました。その気持ちは、私も持っています。多くの県民の皆様が期待をしている。だから、もっと現場の声を吸い上げる機会をこれからもっとほしいということは、そのとおりだと思います。

今後、そういう県民に向けての発信の機会は、どんどんつくるといいと思いますが、その辺りはどうでしょうか。

インクルーシブ教育推進課長

今お話をしたインクルーシブ教育推進フォーラムについてですが、次年度以降も継続して開催して、より多くの方に参加していただきながら、インクルーシブ教育の理解を深めていくことが、全県での推進につながると考えています。その機会などを活用して、インクルーシブ教育実践推進校の取組や生徒の声など、広く県内に伝えたいと考えております。

今後も、様々なこうした機会を活用して、県民に対して周知を図ってまいりたいと考えております。

小野寺委員

多くの生徒が、このインクルーシブ教育の取組を好意的に捉えていることは、これは本当にすばらしいことだと思うし、今紹介があったように、障害のある

生徒が、自分の考えを大勢の人の前で発表することは、本当に教育の効果が出ていると思います。ただ、全員が全員、大人の期待どおりのよい答えを持っているかというと、そうでもないところがあると思います。特に、健常の生徒たちの中には、本心では思っていても、ただ、これは社会的に意味があることだから、自分がきちんと順応していかなければいけないと、自分で納得させていけるところがある人もいるかもしれない。それはそれでいいが、変に偽善の心が育っていかなければいいとは思いますが、できるだけそういう本心を吐露できる環境の中で、引き続き一般入試で入った生徒、この制度を使って入った生徒の両方の思いを、これからもくみ取り続けていただきたいと思います。

ともに生きる社会かながわ、言葉で言うことは簡単ですが、その実現は難しいと思います。こうした教育の取組も大きな普及の作用になっていくと思ってるので、高校におけるインクルーシブ教育をさらに推進していただきたいと要望しますが、1点だけお聞きしたいことがあります。

今の生徒の反応とは離れますぐ、本日の特別委員会資料12ページの令和2年度の取組が、予算とともに記載されています。一番下に、インクルーシブ教育推進支援員、指定校14校に配置とありますが、教員と連携して生徒の学習支援を行うということは、これは教員ではないわけですが、どういう方々でしょうか。

インクルーシブ教育推進課長

今、委員御指摘のとおり、この方は教員の免許を特に必要としない方で、非常勤職員となります。この職員は、生徒の支援として授業の中に入ることもありますし、リソースルームなどで生徒の対応をすることもできる、柔軟な対応ができる方として配置しています。

小野寺委員

教育委員会は御存じのように、障害者雇用が進んでいないではないですか。これは、教員免許を持っている障害者の方が少ないことが、一つの大きな要因になっていると思いますが、実は、前に広島県で話を聞かせていただいたことがあります、教育現場における障害者雇用が進まない、教員免許を持っている方でということは難しいので、こうやって先生方をサポートする職にある方々の中に、障害者を雇用していくことを広島県では行っていた。

一応参考までに、こういう立場で教育に関わる方々、こういうところで障害者雇用を教育委員会の中で推進してはいかがかと提案して、私の質問を終わります。ありがとうございました。